

り。次に命の字について「使也・教也・道也・信也・計也・召也」とある。これは既に禮拜門の所に註せられてゐるので再出である。六要には「玉篇には教・令・使」の註、廣韻には、「使・教・召」の訓を出す註し、「業・招引・使・道・信等追可勘之」と。茲に注意すべきは、使の字の左肩に四聲點が打つてある。この時は上聲で「しむ」「せしむ」(令)で使役の辭である。然れば安養淨土へ歸らしむの意である。教の字は後序には教命とあつて、これは「おほせ」の意味、本國へ歸れとみちびきおしへるの意、道は「いふ」、信は「のふ」、計は「はかろう」、召は「めす」の意である。計は右假名に「ハカラフ」、召は「メス」とある。此等の意は皆以て招喚の意なるが故に、結文には歸命とは本願招喚の勅命とある。

### 教行信證の本質とその展開の様態

日 野 環

善導が自撰の觀經疏について一字一句不可加減を宣し、夢中に於ける化僧の指示を語つた事は「善導的な余りに善導的な」とても言いたい感呼び起す。然るに學佛の道として解學と行學の二つの方法論的な差別を示した。

この解學なる方法論的立場を認めたことは佛教の歴史が遺した崇高にして偉大なる文獻に對する限りなき尊敬を物語るものと思う。

これを現代の學問的感覺を以つて受け取るならば、實證的檢討と論理的追求を性格とする客觀的對象論的な「解明の學」と

でも稱するものと、本質の洞察とその主體的契合とを性格とする行信的な「領解の學」とでも稱すべきものとの容認である。

善導が觀經に觀佛三昧を以つて宗とした事は解明の學的立場よりする至誠を示したものであり、亦念佛三昧を以つて宗となすべしとは領解の學的立場よりの眞實を顯わしたものである。「望佛本願意、在衆生一向專稱彌陀佛名」とは、その深信を示したものである。親鸞に於ける「已證」も「傳承」も實に「領解の學」の内のものであり、漢文原典よりの引文の改訓も解明の學の背景を擔うた領解の學の立場よりである。『教行信證』はかくの如き意味に於ける領解の書である。即ち「教」を「宗」と領受した書である。すなわち「宗教の書」である。すなわち「絕對の聖典」である。

『教行信證』は周知の如く三つの序を持つておる。これは一部六卷を見るべきことを物語つておる。我等は三眼が與えられておるのに、一眼を用いるときは他の二眼を閉じて眺めておりはせぬか。人間が一眼を閉じて他の一眼を以つて見る時、視界は極めて平面化する。若し人に第三の眼があるならば、我等の感得する空間はさらに立體化するであらう。『教行信證』を領受するに後序の眼よりする歴史學的考察と總序よりする佛教史觀と別序よりする久遠の開覺と三眼同時に開いて今に久遠の「眞實教」が顯現するのである。かくて本願を本質としての極めてダイナミックな救済の眞實が今此處にあることを親鸞は三業を以つて説法しておるのである。

『教行信證』の本質についての課題であるが、後序に於て、

「棄雜行兮歸本願」とのべられておるから、ここがあらゆる親鸞的なものの發足の場であるから『教行信證』も此處から辿るべきである。その本質は捨てられた雜行でなく歸された本願であるのは勿論である。即ち各卷の標擧之文に願名が記されておるのはそれを物語る。然るにその本質としての本願は、雜行をすてしめたものであり、それ自らに、歸せしめた本願であるから、「十七願」「十八願」「十一願」とか言う對立せしめられた本願ではなく、「一願」とか「五願」とか言う對立せしめられた本願ではなく言わば「零號の本願」であり、従つてあらゆる本願の相をそれから展開する本質自體である。すなわちそれが「教」に於て説かるべきものである。

この本質としての本願に必然なる様態として各卷の終り方を見れば

- (教卷)……………時機純熟之眞教也應知。  
 (行卷)……………六十行已畢一百二十句  
 (信卷)……………是虛誑語也出略(引文)  
 (證卷)……………仰可奉持可頂戴矣。  
 (眞佛土卷)……………仰可敬信特可奉持也可知。  
 (化身土卷)……………爾末代道俗可仰信敬也可知如華嚴經偈云若有見菩薩：(引文)

教・行・信・證・眞佛土・化身土の各卷には「應知」「已畢」「可頂戴矣」「可奉持也可知」「可仰信敬也可知」と結びの言葉が置かれておるのである。然るに、信卷には結びの言葉がない。化身土卷には「可知」と結ばれながら更に『華嚴經』入法界品の偈文の短文が「可知」なる六卷全體を結んだ言葉の外へ

はみ出しておる。これは重大な事だと思ふ。本願は限りなきもすでに成就した。本願に限りなきが故に「信」に限りなく終止符の打てないところにその性格がある。化身土卷に感銘深き『安樂集』の引文に引き續いて、「爾者末代道俗可仰信敬也可知」と結ばれたことは六卷の大撰述に大圓團である。然るに、意味深遠と言えども「可知」の結語を越えての引文の附載は山海の珍珠の後に素ワドンを食うの趣きである。茲に撰述としての『教行信證』の性格が窺われると思ふ。即ち結びが次への發足の場と轉じて一步踏み出した形である。

御本典は終りなき信に探されて無邊の生死海を顧みて展開して止まぬのである。かくて『教行信證』は、その原始的形態より流れて止まぬのである。眞宗の本尊として安置する阿彌陀佛像のうちにも左足を半歩踏み出しておわすものもあると同じ意であろうか。

### 他力廻向相承の跡づけとしての理解

藤 谷 大 圓

他力廻向の一目こそ親鸞教の眼目であることは申すまでもない。そこで今、佛教々理展開の上において、他力廻向義相承ということが、どのように跡づけられるかを試みたいと思うのである。

佛陀自内證の緣起説とは舟橋博士の述べられている如く、吾々の日常直接經驗の事實を素材として、その受けとり方を教える教説である。老死なる苦惱の解決といつても、決してそれ